

Good Job! Document

「福祉」と「仕事」の
これからの関係づくり

Vol. 07

2018. February



Contents:

Good Job! Collaboration

File 13

社会福祉法人 花水木の会 かすたねっと
× 株式会社 アカオニ

File 14

社会福祉法人 洗心会 のぞみ福祉作業所
× デザインユニット HUMORABO

Good Job! Studies 01 / Keep Trying

/ Good Job! 展 2017-2018

FIELD NOTES from Italy

/ BOOK REVIEW | SELECTOR: 坂倉杏介

福祉、企業、NPO、自治体、研究機関など各分野の専門家が手を組み、新しい仕事をつくり出す「Good Job!」。「Good Job! Document」は、そういった「Good Job!」の思想・活動を広く伝えることを目的に生まれました。「Good Job!」から生まれたプロダクトを中心に、そこに込められた想いやプロセスを紹介。企画・製造・流通など商品開発に携わる、さまざまなプロフェッショナルの言葉を通して、これからの「仕事」「ものづくり」「福祉」のあり方、可能性について探ります。



File 13

手づくり焼き菓子 かすたねっと “目の前にある価値を生かす仕組み”

社会福祉法人 花水木の会

かすたねっと

www.hanamizukinokai.com



株式会社

アカオニ

www.akaoni.org

東京・練馬にて、障害のある人とともに30年をこえて焼き菓子づくりと販売を行うブランド。既存の商品パッケージやツールをリニューアルすることで、すでにある価値やものづくりの姿勢を多くの人へ届けています。



▲素朴で上質な生地にナッツ、チョコ、ごま、黒糖などをそれぞれ混ぜこんだクッキーや、フルーツケーキ、カヌレほか、さまざまな商品を展開。Webサイトにてギフトセットの販売もしています。

焼き菓子店とデザイナーのコラボレーション！
矢吹さん、小坂橋さん、
どうやって実現したんですか？

Q1 本プロジェクトをはじめたきっかけについて、お聞かせください。

矢吹: より多くの人に私たちのお菓子を知ってもらいたい、また利用者さんの工賃向上につなげていきたいという思いから、これまでは店舗販売に加え、出張販売などの顔の見える方法で販売してきました。また販売時には、おいしさはもちろん、お菓子と真剣に向き合うことによって生まれる想いや物語も伝えていきたいと考えていたんです。でも、なかなか簡単にはいかなくて……。そこで、そういった経緯も含めて相談しながら言語化・視覚化していただけるデザイナーに相談し、ブランドリニューアルへと踏み切りました。

小坂橋: 矢吹さんから突然事務所にお電話をいただき、プロジェクトがはじまりました。山形の事務所宛に届いた試食用の焼き菓子は、素朴なおいしさに溢れていて、商品としての完成度も高く、魅力的なものでした。ただ、ロゴやパッケージなど伝え方には課題があると感じ、それらを解決することから着手していききました。

Q2 プロジェクトを進める上で、意識したことやこだわりなどはありますか？

小坂橋: お話を伺い、まず、新しいデザインには、お店が積み上げてきた30年間の表現されていることが重



花水木の会 かすたねっと
矢吹東二さん / マネージャー



アカオニ
小坂橋基希さん / 代表、デザイナー

要だと考えました。2人で話をしていくなかで、ふと「かすたねっと」の根幹には“おいしい”があることに気づいたんです。お菓子を購入するお客さん、お菓子づくりに携わる利用者さん、いずれもこの“おいしい”という感覚が共有されている。そこでデザインでも、まちのお菓子屋さんとしての“おいしい”と福祉施設の個性的な“おいしい”をつなげようと、利用者さんにイラストや文字を描いてもらい、かすたねっとらしい“おいしい”デザインをつくり上げました。

Q3 今後の展開や期待していることについて、お聞かせください。

小坂橋: 今回のリニューアルで、かすたねっとは、地元・練馬区のみならず、全国へ届ける機会が増えました。各地から届く「おいしい！」という声が、利用者さんの自信につながり、さらなる“おいしい”を追求する菓子職人集団へと育ってほしいですね。

矢吹: 引き続き、つくり手の想いがこもった、おいしいお菓子づくりを追求し続けたいです。また、店舗前の木々も成長して木陰をつくり、テラスも魅力が出てきました。今後は地域やご縁のある方々と連携してイベントやワークショップを開催し、お菓子を購入する以外の目的でも訪れたい場に育てていきたいです。

3 TOPICS

デザイナーとともに活動を見直すこと



ただ美しい、綺麗なデザインではなく、かすたねっとのメンバーやスタッフの素顔を理解し、それを商品の顔として形にしていこうと、そのためにデザイナーが求めたのは、これまでのかすたねっとを見つめ直す作業。それは、デザイナーとの対話によって少しずつ進んでいきました。

デザインリニューアルのポイント！



かすたねっとが手づくりのお菓子のコンセプト“おいしい”をまっすぐ、より多くの人へ伝えること。そのために、ギフト箱の巻紙やリーフレット、通販チラシ、Webサイトなどで使われているイラスト、商品名の手書き文字は、施設の利用者による作品を使用しています。

地域における焼き菓子屋さんの役割



ご近所との井戸端会議が行われ、近い関係性を育む場所だった昔ながらの商店街が、都市開発などで次々と消えていく現状。そのなかでかすたねっとは、お菓子の販売だけでなく、人と人の集いの場となるべく、地域の人の生活に溶け込む、焼き菓子屋さんをめざしています。

かすたねっと [設立:1986年 拠点:東京都練馬区]
同地で約30年、障害のある人とスタッフが質の良い食材を用い、シンプルなケーキやクッキーをつくる、地域の手づくり焼き菓子店。

アカオニ [設立:2004年 拠点:山形県山形市]
グラフィックデザインやWebサイトの制作を主に、商品企画からイベント企画、ときには編集や文章制作まで多角的にクリエイションを行っています。



File 14

NOZOMI PAPER® “資源としごとの循環・価値を生む仕組み”

社会福祉法人洗心会
のぞみ福祉作業所 ×

デザインユニット
HUMORABO

www.nozomipaperfactory.com

www.humorabo.com

東日本大震災の影響が続く南三陸にて、福祉作業所のものづくりのネットワーク化を進める「NOZOMI PAPER®」。手すき紙生産と、その紙を用いた商品展開、事業をサポートするための仕組みづくりを行っています。



▲全国から届く牛乳パックなどを原料に、独特の手触りと重みのある手すき紙を生産。活版印刷所やコーヒーショップなど、紙を媒介に多ジャンルの協働を行い、さまざまなプロダクトを発表しています。



福祉作業所とデザイナーのコラボレーション！

森さん、前川さん、 どうやって実現したんですか？

Q1 本プロジェクトをはじめたきっかけについて、お聞かせてください。

森：東日本大震災で多くを失い、ほぼゼロからのスタートでした。しかしその後、数多くのご支援をいただいたなかで、特に紙漉き機械を寄贈していただいたこと、そしてユーモラボに出会えたことで、相乗効果が生まれ、このプロジェクトにつながったと確信しています。この紙は紙の繊維が織り重なっただけでなく、紙を届てくれる人、それを原料に製品にする我々、製品を購入し誰かに送り届ける人、それを受取った人と人がリレーしていきます。そうすることで、想像以上に重みや厚みを感じる紙に仕上がったと感じています。

HUMORABO：活版印刷や珈琲のイベントなど異分野への出店をきっかけに、優しい風合いの紙そのものに魅力があることもわかりました。最近では紙の個性をさらに伸ばすべく、紙の素材を変えたり、原料を染めてみたりとプロダクトとしての魅力づくりにも力を入れています。

Q2 プロジェクトを進める上で、意識したことやこだわりなどはありますか？

森：紙の循環だけではなく、人の想いや気持ちの循環からも生まれている紙なので、常に“感謝”を忘れず



のぞみ福祉作業所
森伸也さん / 施設長



HUMORABO (ユーモラボ)
前川雄一さん・前川亜希子さん
/ デザイナー

想いを込めて製作しています。

HUMORABO：僕たちができることとして、そんな製作過程を紙を購入してくれる方々にもできる限り伝えられるようにしています。人が人を想う。その想いを循環させることが「NOZOMI PAPER®」の根幹にある価値です。そういう環境で生まれる商品だからこそ、人と人をつなぐプロダクトになり得ると信じています。

Q3 今後の展開や期待していることについて、お聞かせください。

森：まもなく東日本大震災から7年になりますが、今年はようやく、仮設から本設に向けた動きが本格化することになりそうです。震災を教訓に、またそれから仲間たちと得たり感じたりして、共有してきたものを大切にしながら、この紙にさらなる想いを乗せて、明るい未来を描けたらと考えています。

HUMORABO：まずは紙をつくる人たちが幸せでいること。それが今まで応援してくれている方々への恩返しであり、このプロジェクトの基本です。また、ひとつの施設で楽しくできる生産量というものもあります。そこは無理をせず、全国の紙すきをしている他施設とNOZOMI PAPER®というひとつのブランドとしての連携も進めていきたいです。

3 TOPICS

紙から、紙をつくるということ。



NOZOMI PAPER®は原料である“紙”を通して新たな価値もつくります。例えば、先生同士のカップルによる結婚式では「生徒たちが飲んだ牛乳パックを原料に」という依頼を受け、手すきの招待状を制作。背景にある物語をかたちにし、届けることのできるメディアでもあります。

“もの”が持つ体感の価値を広げる展開！



デジタル媒体の反動で手触りのある活版印刷に注目が集まっています。ふっくらとしたNOZOMI PAPER®と活版(凸版)印刷は相性も良く、手すき独特の耳と美しい凹凸が魅力です。はがきや名刺など、あたたかな紙を通したコミュニケーションが生まれています。

ものをつくることで、地域をつくる！



のぞみ福祉作業所本設を応援しようと「NOZOMI PAPER Factory SUPPORTER (NPFS)」を設立。グッズ販売を通じた地域と施設の接点づくりを行っています。NPFSのTシャツを着た人が利用者と一緒に紙をすく。ものづくりは、地域づくりの媒介になり得ます。

のぞみ福祉作業所 [設立:2010年 拠点:宮城県本吉郡]

東日本大震災の影響で仮設の拠点を余儀無くされるなか、2012年3月に寄贈された紙すき機を用い、「NOZOMI PAPER Factory」として商品開発を進めています。

HUMORABO (ユーモラボ) [設立:2015年 拠点:東京都新宿区]

障害のある人が関わる商品の販売・企画開発を進めるなかで、その魅力と可能性、課題を実感し、「福祉とあそぶ」をテーマに活動するデザイナーユニットです。

福祉の現場からみる、新しい技術としごと

社会に変革をもたらす技術やそのツールを用いて、障害のある人の個性を生かす新たなしごとづくりを考えていくための勉強会。第1回のテーマは「IoTとFabと福祉」。各分野の疑問から、福祉と技術の可能性を紐解きます！

助成：日本財団 

IoTとFabと福祉

IoTとFabと福祉 具体的には、ど

福祉と技術の関係 4つの地域で探っ

山口 「福祉と技術の信頼と関係づくり」
体制：社会福祉法人大和福祉会 周南あけぼの園、山口大学 ファブラボ山口、山口情報芸術センター [YCAM]

YCAM協力のもと、福祉施設職員と、技術に明るいエンジニアが、各分野の活動内容や抱える課題を共有するワークショップを実施。互いの状況を知り、議論を深めてゆくための下地をつくっていきます。勉強会で出会った山口大学国際総合科学部と、周南あけぼの園が連携。ファブラボのもとFab機材の講習を受け、福祉施設の人たちと大学ルドワークを行い、関係を編みつつあります。



岐阜 「ケアとしごとに活かす」
体制：社会福祉法人いぶき福祉会 第二いぶき、情報科学芸術大学院大学 [IAMAS]

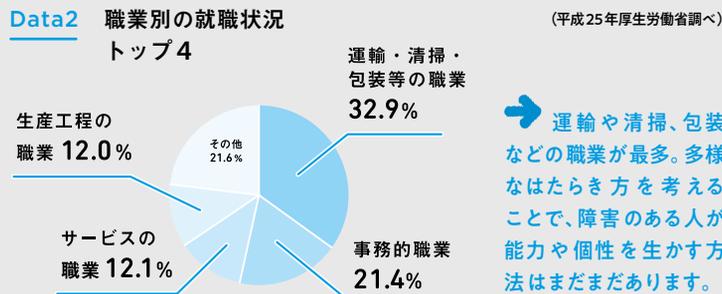
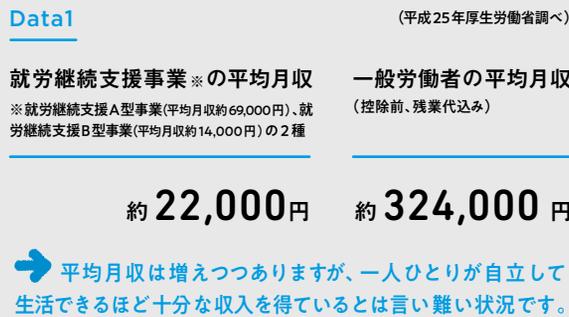
先端的技术と芸術の融合を目指すIAMASと、障害のある人が生きる社会を目指す第二いぶきを中心に、IoTとFabを福祉に生かすためのワークショップを開催。福祉の現場とどう結びつのかを考え、アイデアを交換しました。その後も、実際に施設でセンサーを使い、スマホアプリで成を試すなど、可能性を模索。技術への期待とともに、使いや、命やプライバシーに関わる不安など、課題も見えて



現在の福祉って、どんな状況にあるの？

障害のある人の就労状況を見直し、多様なはたらき方を模索中です。

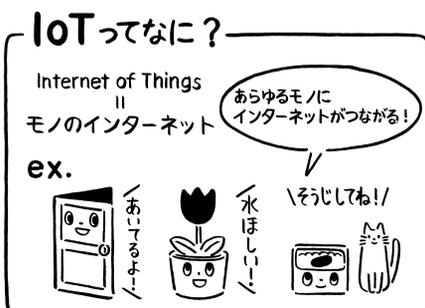
障害福祉には、障害の度合いに応じた多様な支援の制度があります。入浴や食事の援助、移動の同行、リハビリテーションなど生活をサポートすること、そして就労をサポートすることもそのひとつです。現状、約788万人の障害のある人のうち、約4割が在宅(無職)。環境やしごとの幅を広げることで、多様なはたらき方をできる人がもっといるはずだと考えています。新しい技術を福祉施設や障害のある人、サポートする人の日常に取り入れるべく、さまざまな実践と多ジャンルの専門家による議論を進めています。



そもそも、IoTってなに？

“もの”自体が今ある状況を分析し、インターネットを介して連携する技術！

IoT (Internet of Things)は、私たちが日々生活している環境を、インターネットを通してつないで、より良くしようという提案のひとつ。これまでインターネットにつながっていたのは、PC・スマートフォン・ゲーム機などのデバイスだけだったのが、最近では時計・眼鏡・ペンなども連携し、さまざまな生活スタイルが生まれています。例えば、植木鉢が土の中の水分量を基準に水をあげるタイミングを教えてくれたり、冷蔵庫が毎日の栄養計算や好みのレシピをふまえて食材を注文してくれたり。私たちの日常を下支えし、豊かにしてゆく可能性を持つ技術です。



IoTには、こんな可能性がある

小林大祐さん
たんぼの家スタッフ

あらゆるものがインターネットにつながる利点は、これまでつなげられなかったもの同士をつなぐことができることだと思います。遠くにいて〇〇できない、近くにあっても〇〇できないなど、人と人、人との間にあった距離(障害)をなくすことができる。それがケアやビジネスに展開できると考えています。

福祉、 みんな取り組みがあるの？

ものづくりを
しています！

障害福祉×現代技術の実験的な取り組みを2017年9月よりスタート。4つの地域で障害のある人の新しいしごとや暮らしを育む、福祉と技術の関係づくりを進めています。

福岡

「デジタルメイカーを育てる」

体制：一般社団法人生き方のデザイン研究所、北九州イノベーションギャラリー [KIGS] デジタル工房、NPO法人まる／工房まる、九州大学大学院芸術工学研究院

インクルーシブデザインを軸に活動する九州大学大学院芸術工学研究院が「2030年の福祉のしごと」をテーマに、ワークショップ「Design for SDGs in Fukuoka」を開催。これを皮切りに、福祉施設と技術者による協働の試行をスタート。障害のある人自身がデジタル工作機を使いこなせる人材となるべく、ソフトウェアや機材の学び方、身体的・精神的なサポート方法など、福岡市と北九州市で試行中です。



ラボ山口協力
生がフィー

奈良

「デジタル工作機械によるものづくり」

体制：社会福祉法人わたぼうしの会 Good Job! センター 香芝

2016年、障害のある人の生きがい・はたらかいのあるしごとを生み出す拠点として、「Good Job! センター香芝」を設立。伝統工芸とデジタル機器を組み合わせた新工芸や、地元奈良の木材を活用したオリジナル製品などを生み出しています。奈良県内・県外の福祉施設とのものづくり連携、研究者やクリエイターを交えた勉強会など、福祉分野に限らずネットワークを広げながら、新しいしごとづくりに取り組んでいます。



3Dデータ作
いこなす難し
きています。



Fab

ってなんでしたっけ……？

デジタル・アナログを分けず、 あらゆるものづくりに関わる 行為の総称となる言葉です！

Fab(ファブ)は、「Fabrication = つくること」と「Fabulous = 素晴らしい」の2つの意味が含まれる造語で、製造・製作・組み立てなど何かをつくり上げることの総称です。そのなかで、レーザーカッターや3Dプリンターなど、コンピュータと接続された工作機械によって素材を成形する技術「デジタルファブリケーション」が注目されています。また、データ化された設計図や素材の扱い方・レシピをインターネット上に公開することで、世界中のつくり手と、ものづくりのプロセス、もののアップデートを介したコミュニケーションが生まれています。

Fabってなに？



Illustration: Yosuke Yamachi
(初出: 「Good Job! Annual Report 2015-2016」)

Fabには、 こんな可能性がある



藤井克英さん
Good Job! センタースタッフ



一点物の価値を高めることと、手加工を超えた生産力を考えることは、ものづくりにおいて直面する課題です。繊細な造形や短時間での加工を可能にするFabと、手仕事で洗練された伝統工法など異なる分野をミックスさせることで、互いの特性が融合された創作物や加工環境をつくることができます。



ファブラボ？ ファブカフェ？ ファブ社会って言葉もあるの？



根幹となる思想を共有し、 豊かな状況を生み出しています！

近年「FabLab(ファブラボ)」という言葉を目にする機会が増えてきました。ファブラボは、アナログからデジタルまで多様な工作機械を備えた実験的な市民工房であり、基本理念を共有する地球規模のネットワークです。ほかにも「ファブ施設」「ファブスペース」「ファブカフェ」など名称は異なりますが、個人による自由なものづくりの可能性を拡げ、「自分たちの使うものを、使う人自身がつくる文化」の醸成をめざす拠点ができており、福祉施設においても、デジタルファブリケーションを活用できる土壌ができつつあります。



ファブラボ北加賀屋



ファブカフェ 飛騨

IoTデバイスやサービスって、 どんなものがあるの？

IoTの可能性を各分野が見出し、 多様なプロダクトが生まれています！

社会を変える新しい技術は、分野をこえてあらゆる生活の場面へと浸透していきます。ますます増えつつあるIoTデバイスから、暮らしに寄り添うヒントを見出すことができます。

MaBeee(マビー)

単3型乾電池の出力操作・連携がスマホでできるIoT装置



JINS MEME(ジンズ・ミーム)

ライフログ機能を擁し、体の内側を見える化するウェア



Neo smartpen(ネオスマートペン)

専用紙に書くだけで、デジタル化&アプリ同期できる文具



keep trying...

障害のある人と地域の伝統技術をつなぐ

株式会社 幸呼来 Japan



株式会社 幸呼来 Japan

設立:2011年
住所:岩手県盛岡市安倍館町19-41
主な業務内容:障がい福祉サービス就労継続支援事業所の運営、「裂き織」商品の製作・販売
saccora-japan.com

裂き織とは……

「裂き織」の起源は江戸時代中期。寒冷な気候のため綿や繊維製品が貴重だった東北地方にあると言われている。当時は日常生活に用いる布などを、裂いてねじりながら織り上げていた。



の場合 はじまり



代表・石頭さんには、こんな悩みが……

伝統技術「裂き織」を未来につなげたい

株式会社 幸呼来 Japan代表・石頭さんが考える
伝統産業と障害のある人の可能性

岩手・青森にまたがる南部地方(南部藩)には、「裂き織」という布を再生させる技術が伝えられてきましたが、とても手間のかかる裂き織は織る人も少なくなってきています。そんななか、障害特性で素晴らしい織物を織る方々に出会いました。地域の文化、伝統技術を後世につなげるため、障害の長所を生かした取り組みができなかと考えました。ひとつのものごとに継続して集中できる力、同じ作業を継続できる力、正確に几帳面に仕上げる力など、それぞれの障害で発揮できるさまざまな力があります。その力を組み合わせることで伝統産業に障害のある方も積極的に関われると考えています。

福祉事業所で裂き織を織る
蟹久保寿子さん

大好きな織の仕事ができてうれしいです。幅広の織を織るときはとても大変ですが、織り上がったときは達成感があります。わたしたちがつくった商品をお客様が買ってくださることがうれしいです。いつかほかの人に、織を教える先生になるのが目標です。

2010 STEP 02
裂き織の生産をはじめ、販売事業を立ち上げる

伝統技術を軸とした
事業をスタート



「この技術を埋もれさせるのはもったいない」との考えから、勤務先の社長に相談し、裂き織の事業を2010年7月に立ち上げました。初期は、支援学校を卒業した障害のある人2名を含め4名でスタート。

地域に根づく素材から
新しいお土産を開発



材料となる布をどうするか考え、思いついたのが、岩手を代表する夏祭り「盛岡さんさ踊り」の浴衣を使用すること。カラフルな浴衣の色合いで織った雑貨が盛岡のお土産として少しずつ認知されるようになりました。

仕事を発注している事業所スタッフ・高橋さんが考える
ネットワークによる
仕事づくりの可能性

当事業所とは2年ほど前からお付き合いさせていただいております。着物や布生地を裁断、加工を主な作業とし、現在は常時4名ほどのスタッフが取り組んでいます。お引き受けさせていただいた作業に取り組むなかで一番良かったと思うことは、生地を納品後に幸呼来 Japanで完成された製品を見たとき、スタッフの目が輝き、生き生きとしていたことです。携わった製品が世のなかで知れ渡ることで、職業人として仕事に誇りを持ち、はたらく喜びを知り、その達成感が次なる意欲につながることを、支援員として経験させていただきました。今後とも障害のある人の就労支援を盛り立て、また、当事業所もともに成長できるよう、その一翼を担っていければ幸いです。

2009 STEP 01
障害のある人が取り組む
裂き織と出会う

石頭悦

高等支援学校

見学

岩手県中小企業家同友会の障がい者問題委員会の勉強会で盛岡市にある高等支援学校を見学。障害のある人が訓練で取り組む裂き織の美しさ、緻密さに感銘を受ける。近年、裂き織はあまり織られなくなったが、その独特の風合い、古布や残反(生地の残り)を利用するという特色が注目されている。一方、高等支援学校時代に技術を習得しても、就職にはなかなか結びつかないという先生の話が頭に残っていた。

協働したオニツカタイガー担当者・平山さんが考える
伝統技術×福祉プロジェクトとの
協働の可能性

「さっころ project」を知ったきっかけは、弊社アメリカのデザイナーからの連絡でした。彼女が、彼女の母から「友人が着物を裂いて織っているので古い着物をあげた」という話を聞き、その後「裂き織ってなんだ?」とリサーチするなかで、明るい色使いで織られている、さっころ projectの生地と出会いました。また、石頭社長が起業された理由が、弊社社長が起業した理由(青少年の育成のために何が出来るか)と似ていると感じ、ぜひ、一緒にお仕事をさせていただきたいと依頼し、今に至っております。裂き織の魅力は、日常生活のなかで不要となったものに新しい価値を生み出し、必要なものに変えるところだと思います。さっころ projectを進めて行く上で、裂き織の温かみと、石頭社長、村山さん、赤坂さんの温かい心に、本当に感銘を受けました。実際の商品に対するお客様の反応は、弊社の世界各国の直営店に展開しましたが、どこの国でも即日完売の人気ぶりでした。本当にうれしかったです。

STEP 04

企業と対等なパートナーになる
「さっころプロジェクト」の展開

メーカーやファッションブランドから預かった余り布と裂き織の技術を融合させ、あらたな価値と大きな可能性を持った生地として、リデザインするプロジェクトを開始。

01

ファッションブランド
「ANREALAGE」



2014年にBEAMS創造研究所とヤフー復興支援室が立ち上げた「TOKYO DESIGNERS meet TOHOKU」で実現。ANREALAGEのプリント生地を裂き織の素材として使用。

02

生活雑貨工芸品製造小売
「中川政七商店」



奈良に本社を置く中川政七商店が、創業300周年を記念して開催した「大日本博覧会岩手博覧会」で発表したバッグシリーズ。中川政七商店の3種類の布がブレンドで使用されている。

03

シューズブランド
「オニツカタイガー」



機能性だけでなく、ファッションとしても人気のオニツカタイガー。「地域の伝統技術をサステナブルに」をテーマに掲げ、シューズに東北の織り子がつくった裂き織を採用。

STEP 03

東日本大震災後、独立して
株式会社 幸呼来 Japan 設立



ハンドメイド・ファブリックブランド「パノレーチェ」

震災で状況が一変するなか、社内で裂き織事業継続が不可能に。はたらく場を確保するため独立を決意。2011年9月に幸呼来 Japanを設立。メーカーで使わなくなった生地の残反を織り、生活に合わせたデザインをめざす「パノレーチェ」を立ち上げました。

STEP 05 裂き織の技術を地域のしごととしていく
仕組みづくりとネットワーク化

——すでにさまざまな協働を生み出していますが、今後の展開についてお聞かせください。石頭: さっころ projectでは地域連携で裂き織を世界に発信していきたいと考えています。地域の福祉施設には、さまざまな人材が溢れており、各々の特性(長所)を生かせるよう作業を切り出して分業化、量産できる体制を整備。品質が一定になるまで訓練は必要ですが、技術指導をしっかりと行い、担い手を育成します。1つの事業所だけでは難しくても、多くの事業所が得意とするところに関わることで、市場に流通できる物量が生産可能となるんです。

木綿が貴重だった時代に生まれた裂き織には「もったいない」と思う気持ち、ものを愛おしむ気持ちも一緒に織り込まれています。眠ったままの布と、能力を生かす場のなかった障害のある人たち、そして細々と受け継がれる東北の伝統工芸。裂き織によってそれぞれに光を当て、社会のなかで生かされる取り組みを行い、盛岡を裂き織の産地として世界に認められる地域にしていきたいです。



幸呼来 Japan 代表
石頭悦さん

1965年、山形県酒田市生まれ。盛岡市在住。障がい福祉サービス就労継続支援A型・B型事業所を運営している。



生活支援員
高橋純一さん

1979年生まれ。介護福祉士として介護業務を経験した後、2013年に入職。主に障がい者の就労支援に携わる。特技は手話通訳。



アシックスタイガー開発チーム
平山誠さん

広島県出身。アシックス株式会社オニツカタイガー統括部所属。「オニツカタイガー」ブランドのシューズ開発業務に携わる。

TALK 1

17 「アート・デザインを生み出すネットワーク ～韓国、イタリアの事例から～」
19:00-20:30 渋谷ヒカリエ 8階 8/COURT

韓国のNPO rawside(ローサイド)と、イタリアのNPO Laboratorio Zanzara(ラボラトリオ・ザンザラ)を事例に、背景にある福祉事情や、障害のある人から生みだされている製品づくり、そして活動をひろげる仕組みについて話します。

コ・ジェフィル(NPO rawside 共同代表、映像作家)
NAOKO/奥村奈央子(ソーシャルコーディネーター、プランナー、デザイナー)

コーディネーター・原田祐馬(UMA/design farm 代表・デザイナー)

TALK 2

20 「多様な働きかたを提案するダイバーシティマネジメント」
19:00-20:30 渋谷ヒカリエ 8階 8/COURT

社会就労が難しい大学生に対してインターンシップを通して働く機会をつくるベネッセビジネスメイトと明星大学、短い時間しか働くことができない人に仕事を提供するソフトバンク、個人の多様な力を発揮するための企業と大学の先進的なアクションを学びます。

加藤光代(株式会社ベネッセビジネスメイト)/佐藤亮(明星大学 発達支援研究センター)/工藤陽介(明星大学 ユニバーサルデザインセンター)/木村幸絵(ソフトバンク株式会社 CSR統括部)

FORUM

19 Good Job! フォーラム 「IoTとFabと福祉の可能性」
18:00-20:45 FORUM 8 階 カンファレンスルーム A

国内4カ所(山口・福岡・岐阜・奈良)で行われている実験と実践を通して、福祉スタッフと技術者の関係づくりから、新たな技術と障害のある人の仕事づくりまで紹介します。

○基調講演「FabとIoTの今と未来」 ○事例報告1「福祉と技術の関係づくり」 ○事例報告2「デジタルメイカーを育てる」 ○事例報告3「新しい技術を福祉に活かす体験と試行」 ○事例報告4「デジタルファブリケーションの実践」 ○ディスカッション「福祉スタッフと技術者の本音と建前」

企画展

IoTとFabと福祉

IoT(Internet of Things)やFab(Fabrication)など、現代だからこそ可能になった技術を福祉に活用することが期待されています。国内4カ所(山口・福岡・岐阜・奈良)の実験と実践を通して、新たな技術と障害のある人の仕事づくりを紹介します。

助成: 日本多様性芸術



山口

「福祉と技術の関係づくり」

社会福祉法人大和福祉会
周南あけぼの園
× 山口大学国際総合科学部



福岡

「デジタルメイカーを育てる」

九州大学大学院芸術工学研究院
× NPO法人まる 工房まる
(一社)生き方のデザイン研究所
× 北九州イノベーションギャラリー



岐阜

「ケアとしごとに活かす」

社会福祉法人いぶき福祉会 第二いぶき
× 情報科学芸術大学院大学[IAMAS]



奈良

「デジタル工作機械によるものづくり」

社会福祉法人わたぼうしの会
Good Job! センター 香芝

Good Job! Award 入選展

障害のある人との協働から生まれた魅力的なしごと・はたらき方を全国から募集する「Good Job! Award」。応募数51件のなかから選ばれた12件を紹介します。



愛知

「マヌモビールズ」
Manu Mobiles
“動く彫刻”や“吊るすインテリア”と呼ばれる「モビール」。紙と糸でつくられる職人的技術を要する作業を、4つの福祉施設と連携して製作し販売している。



千葉

「胡蝶蘭の苗のオーナー制」
NPO法人AlonAlon
苗に出資をすると、障害のある人が苗を育て、育った花の一部を出資者の大切な人へ、残りを販売して所得を生みだす。企業や個人が関わりやすい仕組みを構築している。



東京

「ショートタイムワーク制度」
ソフトバンク株式会社
精神障がいや発達障がいなどを理由に、長時間勤務が困難な方が週20時間未満で就業できる制度。意欲があっても就労できなかった方のための雇用システム創出を目指す。



神奈川・東京

「乳酸発酵 OYATSU」
NAOKO × COBO × かすたねっと
福祉施設が乳酸菌と出会い発酵しました。自然発酵乳酸菌でこれまでのおやつ・食品をアップデート。福祉施設が日本の新しい、からだによい食文化の発信の役割を担う。



広島

「umi tote [ウミトート]」
NPO法人 萌友-for you
暮らしのそばにある海をテーマにデザインしたトートバッグを製作。1日1枚コツコツ描くなど、施設が自律的に継続・発展できる手法をつくっている。



奈良

「あたくし組合と始めよう!」
あたらしい・はたらくをつくる福祉型事業協同組合
小さい規模で点在している福祉施設は大きな商機や機会を得にくい。その可能性を、異業種の事業協同組合という福祉の枠組みを超えた連帯のあり方で広げている。



東京

「手づくり焼き菓子 かすたねっと」
社会福祉法人 花水木の会
東京・練馬で30年間続く手作りの焼き菓子屋。デザイナーとの協働によって、上質な素材を生かしたおいしさものづくりへの姿勢を伝える魅せ方に成功している。



東京

「大学と企業の連携による就労支援」
株式会社ベネッセビジネスメイト・明星大学
社会就労が難しい発達障害のある学生をフォローする仕組み。障害者雇用のノウハウを持つ企業でのインターンシップを通して、はたらく機会を提供している。



韓国

「リンクマーケット・イッチャン」
NPO rawside [ローサイド]
障害のある人の表現活動と、そこで形成されるコミュニティを継続して拡散する場づくり。アート×デザインによって新しい参画者を増やして活動を広げている。



愛媛

「自然栽培パーティ」
一般社団法人 農福連携自然栽培パーティ 全国協議会
はたらく場が少ない、農業や肥料への不安、休耕地の増加、地方衰退という多重課題を、障害のある人が核となって全国にネットワークを広げ楽しく解決している。



岩手

「さっくらProject」
株式会社 幸呼来Japan
伝統的な裂き織技術を継承し、地元「さんさ踊り」の浴衣や、メーカーから預かった余り布に織生地として新たな命を吹き込むテキスタイルプロジェクト。



宮城・東京

「NOZOMI PAPER」
NOZOMI PAPER Factory × HUMORABO
東日本大震災を機に南三陸町のぞみ福祉作業所ではじまった手漉きのリサイクルペーパー。手づくりの風合いを生かした人々の想いをつなぐプロジェクト。

審査員コメント



田村大さん 株式会社リ・パブリック共同代表
「ケアをする/される」という単純な福祉の図式を打ち破って、障害福祉の新たな挑戦が社会変化をリードする場面……最先端のお菓子づくりや公共事業などさまざまなかたちで現れています。障害福祉側から社会に提案する。Good Job!の動きをどうとらえるかが大事な観点だと思います。



里見 喜久夫さん 株式会社はたらくよこひデザイン室 季刊「コトノネ」編集長
障害のある人が特殊なはたらき方を必要としているのではなく、現代社会では無理が生じるはたらき方に対して「そんなことしなくてよい」と疑問と提案を投げかけています。単に表面的な意匠を変えるデザインでなく、活動そのものの仕組みや、社会そのものを構造的に変えているデザインの力を感じました。



柴崎由美子さん NPO法人エイブル・アート・ジャパン代表理事
福祉も共創の時代、仕組みに眼をみはるものが多数ありました。どうすることが、やりがいとか、工賃アップとか、幸せを分かち合うことにつながるのか、そんな議論が合宿や展覧であると思います。それらを社会的インパクトへつなげるのはGood Job!プロジェクトの役割であり課題のひとつだと感じています。



原田祐馬さん UMA/design farm 代表
Award初回から審査を続けていますが、バラエティに富んだ取り組みが増え、知らないことの多さにワクワクしています。「Good Job!」が生まれるための、協働する人の大切さを改めて感じ、誰とつながり、どんな仕組みがあるのかが考えさせられました。デザイナーによる自主的な活動の応募も増えており、今後も期待したいです。



林千晶さん 株式会社 ロフトワーク代表取締役
「弱い人を助ける」「資金を上げてあげる」ではなく、違う力を持っている人だと「能力を生かして一緒にグラデーションになっている」と感じました。一人ひとりの能力を、「一人きりじゃなく」、つながりながらコラボレーションをしていることが興味深かったです。福祉がまだ出会っていないところと接続させてみたいです。



山田 遊さん 株式会社 メソッド代表取締役
「福祉施設」という単語を、日本の「町工場」「森林」「地域」と置き換えることができるくらい、同じ悩みを抱えているなあということが、審査を通して感じたことです。また、良くも悪くもプロジェクトをディレクションする側として、どれだけその悩みが切実であるかを痛感し、これも世間のほかの分野と変わりないんだな、と思いました。

FIELD NOTES

Good Job! な活動と出会い、感じ考えたことをつづる

from Italy

グラフィックやプロダクトを通して、まちと人の関係をつくり出す

執筆

奥村奈央子 / NAKO

ソーシャルコーディネーター/プランナー/デザイナー

福祉と食のフィールドを中心とした「福祉×α」のコーディネイト、プロデュース、企画デザインをしています。Laboratorio zanzara コーディネーター、社会福祉法人花水木の会理事。 www.naokoo.com



トリノのラボラトリオ・ザンザーラは、デザイナーとソーシャルワーカーが共同で設立したNPO福祉法人です。知的障害者一人ひとりの個性を大切に思い、彼らの想像力と手しごとによるクリエイションを軸に、プロダクトデザインやグラフィック制作をしています。障害者とデザイナーの共同作業によって生まれる商品は、デザイナーだけで制作するプロダクトとは違う化学反応が生まれているようです。ものづくりの喜びや楽しさが伝わってくる線やかたちが素材と加工の感性によってより魅力的な商品に仕上がっている様子は、デザインの国イタリアならではのようです。商品を通じて、まちの人々や旅行者と交流を持ち、また新しい作品のインスピレーションに変えていくラボラトリオ・ザンザーラ。日本での彼らの紹介を2013年からはじめて、ギャラリーや蔦屋書店、美術館などで取り扱いをしていただき、昨年からは企業とのコラボレーションがはじまり、2018年は、彼らのデザインによるオイルやワインなど、さまざま展開されていく予定です。ラボラトリオ・ザンザーラのこれからの展開を楽しみにしてください！

イタリア料理店「REBECCA'S CANTINA」のオーナーシェフのラベルデザインを担当



Laboratorio Zanzara (ラボラトリオ・ザンザーラ)

2001年にデザイナーとソーシャルワーカーが共同で設立したイタリア・トリノのNPO福祉法人。職員全員がデザイナーで、彼らのアトリエはまちの中心街にあり、まちの人たちに見守られながら、自由にアトリエとまちを行き来し、紙の張子やシルクスクリーンのオリジナル商品を作っている。また企業や自治体のグラフィックデザインも多数手がけ、質の高いデザインとプロダクトの制作を通して社会と関わり、クリエイティブの可能性を創造しながら、社会のあるべき姿を提示している。
<https://www.youtube.com/watch?v=fr2nlRsW1g0>

SELECTOR

BOOK REVIEW

これからの福祉や仕事を考える 3冊



坂倉杏介

「コミュニティマネジメント研究」

01



『中動態の世界 意志と責任の考古学』

著者：國分功一郎
発行：医学書院/2017年

依存症の患者の現場からはじまり、消えてしまった中動態を丹念にたどることで、私たちがとらわれている「責任」や「主体性」の足元を洗い直してくれる1冊。

02



『ゆっくり、いそげ』

～カフェからはじめる人を手段化しない経済～

著者：影山知明
発行：大和書房/2015年

利益を目的にすると、客は「少しでも得しよう」という消費者的人格をあらわにする。伝説の(?)カフェ・クルミドコーヒーの、贈ることで贈られる新しい経営の実践。

03



『生命知としての場の論理』

～柳生新陰流に見る共創の理～

著者：清水博
発行：中央公論社/1996年

自分の力でねじふせるのではなく、「相手を自由に働かせて、その働きにしたがって勝つ」新陰流の「活人剣」。ケアの身体感覚にも通じる、自他非分離の世界観。

3冊の本を選んだ理由

福祉と仕事といえば、「ケアする人とケアされる人」という言葉が思い起こされます。なぜ私たちはすぐに、能動と受動に分けてものを考えたがるのでしょうか。このような問いかけをするのが、國分功一郎の『中動態の世界』です。実は古語にはもともと「する／される」には取まらない「中動態」という態があって、それがのちに能動と受動に分かれていったのだそう。そしていつのまにか私たちの思考は、この文法に規定されてしまった！ 考えてみれば、想いは能動でも受動でもなく湧き上がってくるものだし、関係性は合わせ鏡のようにお互いをつくり合うもの。そうした視点を思い返させてくれる3冊の本たちを選んでみました。

坂倉杏介 / 東京都市大学都市生活学部准教授、三田の家LLP代表。専門はコミュニティマネジメント。多様な主体の相互作用によってつながりと活動が生まれる「場」に注目して、地域や組織のコミュニティ形成手法を実践的に研究している。



GOOD DESIGN AWARD 2016
グッドデザイン金賞

Good Job! プロジェクトは、福祉と異分野の連携による新しいはたらき方の創出が評価され、2016年度グッドデザイン金賞を受賞しました。

GOOD DESIGN AWARD 2017
BEST 100

Good Job! センター香芝は、多様な人にとっての居場所と活動場所を提供する試みが評価され、2017年度グッドデザイン・ベスト100を受賞しました。

MESSAGE 成田修 (社会福祉法人わたぼうしの会 統括施設長)

Good Job! Awardは今年で3回目ですが、これまでなかった新しい発想による取り組みがまだまだたくさんあることがわかってうれしい限りです。企業、大学、NPO、社会福祉法人などの主体や、デザイナー、パイヤー、教員、学生、施設職員などの職種をこえて、新しい「しごと」を生み出すための協働が各地ではじまっていることをヒシヒシと感じました。今回は入選団体のみなさんに奈良のアートセンター HANA や Good Job! センター香芝に集まってもらい、デザイン合宿を行いました。はじめての試みでしたが、Good Job! 展

で取り組みを紹介するための90cm角のボードを使った展示構成や3分間の最終プレゼンをブレて行い、アドバイザーも入って参加者同士で意見を交わしました。面積や時間に大きな制約があるからこそ、その取り組みで最も伝えたい大事なことは何かを突き詰めることとなり、お互いに伝えることで学び合う関係がつくれたのではないかと思います。本来、こうした関係性を地域や分野をこえて築くことが Good Job! プロジェクトのめざすことです。渋谷ヒカリエでみなさんにお会いできることを楽しみにしています！

【Good Job! Document 07】発行日：2018年2月16日 発行元：一般財団法人たんぼの家 〒630-8044 奈良市六条西3-25-4 Tel 0742-43-7055 Fax 0742-49-5501 E-mail goodjob@popo.or.jp URL http://www.goodjobproject.com/監修：Good Job!プロジェクト 編集ディレクション&編集：多田智美、永江大(MUESUM) アートディレクション&デザイン：原田祐馬(UMA/design farm) デザイン：西野亮介(UMA/design farm) 印刷・製本：株式会社シーズクリエイティブ *本フリーペーパーは、下記の展覧会開催に際し発行されました。【Good Job! 展 2017-2018】主催：一般財団法人たんぼの家 / 共催：公益財団法人パブリックリソース財団 / 特別協賛：株式会社丹青社、トヨタ自動車株式会社 / 協賛：明治安田生命保険相互会社、コクヨ株式会社、株式会社プリプレス・センター / 協力：渋谷ヒカリエ、一般社団法人北海道チャレンジアート&プロダクト、NPO法人エイブル・アート・ジャパン、NPO法人まる 企画展「IoTとFabと福祉」 助成：日本財団